

EurekaXIII

六年制通信 No.4 令和7年4月25日(金)号

他者の評価を得る

始業式で日本人ならではの心象風景の話をしました。宣長の「朝日に匂ふ山桜花」や芭蕉の俳句を取り上げましたが、少し補足をします。「古池や蛙とびこむ水の音」の蛙を日本人は普通一匹と考えと思いますが、民族によっては大きな池の周りを何百という蛙が隙間なく囲んでいて、それが一斉にとびこむ様子を想像することもある、とここまでは始業式で話しました。補足というのは、国によって想像する蛙の大きさにも違いがあるということです。私たちは比較的小さな蛙を思い浮かべると思いますが（ですから「音」は「ポチャン」ないし「チャポン」でしょうね）、学生時代に色々な国から来ていた留学生たちに聞いてみたら、何とウサギくらいの大きさの蛙を想像する人もいて驚きました。「音」は「バシヤッ!」でしょうな。豪快ですが、そんな光景は俳句にはなりませんね。それにしても日本をあれだけ愛したラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が *frogs* と複数形にしているのが今でも理解できないなあ。

俳句で思い出しましたが、先日ラジオを聴いていたら山口素堂の「目には青葉 山不如帰 初鯉」（カツオは松魚という表記もあります）を「めにあおば やまほととぎす はつがつお」と詠んでいまして、ああ昔私も誤解していたなど、懐かしく思いました。若い時に私も上の句が「目には青葉」だと字余りになるので「目に青葉」と語呂がよくなるよう勝手に直して覚えてしまったのです。それで何年もたってから、これはどうしても「目には…」と「は」がなければならぬと考えるようになりました。「目に青葉」だと「山にホトトギス」となり、では何に初鯉なのか、そこが極めてあやふやです。しかし「目には青葉」となれば「耳には、山で鳴くホトトギス」、「舌には、初鯉」と素直に理解でき、初夏の視覚、聴覚、味覚をそれぞれ表している名句であることがわかります。初夏の名物を詠んだわけですね。なるほど、上の句が字余りでもこれが正解なのですね。これがわかった時は嬉しかったのでよく覚えています。

ちなみに芭蕉も素堂も 17 世紀の俳人ですが、彼らの日本語は我々現代人にすんなり入ってきます。注釈も必要ないですね。17 世紀と言えばシェイクスピアが亡くなったのも 1616 年ですからね。彼の詩を現代の英米人が苦勞なく読めてもおかしくないはずですが、実際には学校で習わないと読めません。日本語は、特に大和言葉は、たとえ専門的な知識がなくても私たちの血肉になっているようです。

日本語に宿る日本人の心象風景について考えるのは、私にとっては大変楽しいことです。ですから、いつも頭の片隅にこの手の問題を置いています。それで最近、中高生日本語研究コンテストというのがあることを知りまして、君たちも探究活動の一環として何

か言葉の問題を取り上げ研究して応募してみたいかと思うのですが、どうでしょうか。私は、君たちが中学生のうちにさまざまな分野に応募することを奨励しています。例えば、「青春 21 文字のメッセージ」、「全国学芸サイエンスコンクール」、「科学の甲子園」、「青少年読書感想文三重県コンクール」、「税についての作文」、「ごはん・お米とわたし」、「ありがとう一行詩コンクール」などですが、これに加えて少し学術的に発展したものとして「中高生日本語研究コンテスト」に応募する生徒が出てきてほしいですね。私が応募を奨励するのは、人は自分のことを自分でよくわからないものだと思うからです。自分が何に向いているのか、自分ではわからないけれど周りの人は割とはっきり「君は〇〇に向いている」とか「君なら〇〇ができる」と言うことがあるでしょう。それが自分では意外だったりします。ですから他者から評価を受けるとするのは自分を発見する手がかりとして悪くないと思うのです。

さて、「中高生日本語研究コンテスト」の研究テーマとして、参考になるかわかりませんが、私が面白そうだと思うものを一つ紹介してみましょう。言語によって色の示す範疇が違うという問題です。虹が何色かという問題や「みどり」や「きいろ」がどの範囲の色をカバーするかというのも面白いですが、「みどり」で連想する意味の違い、英語の **green** には成熟していないというニュアンスがありますが日本語の「みどり」には瑞々しいイメージがある、そういった「色の意味範疇」が言語によってどう違うかを研究したらこれは民族学的にも非常に面白いと思うのですがいかがですか。

今週のおすすめ

・杉井 光 『世界でいちばん透きとおった物語』 (新潮文庫)

これ、面白かったなあ。私、本自体にトリックが仕掛けてあるのは嫌いじゃないので。以前紹介した藤崎翔の『逆転美人』とか泡坂妻夫の『しあわせの書』も面白かったな。今回の本もあとで見返して、あ、この本自体がそういうふうに書かれているのか、と感心しました。最後の「 」問題は、自信をもってあることをしたら、なるほどという結果でした。見破れて嬉しい。どうですか。読みたくなかったですよ。

人気ミステリー作家の宮内が亡くなる。彼は妻がありながら多くの女性と交際し、よそに子どもまであった。その子がこの物語の主人公。父と会ったことはない。苦勞して亡くなった母のために父を憎んでもいる。ある日宮内の長男から突然電話がかかってくる。父親が死ぬ前に『世界でいちばん透きとおった物語』という題名の物語を書いていたらしいが原稿が見当たらない、君何か知らないか、と。これ、見つけたら売れるというわけですね。それで幻の原稿探しに主人公は巻き込まれます。主人公の母も校正の仕事をしており敏腕編集者がよく家に訪ねてきていたのだが、その霧子さんとともに生前の父を知る人を訪ね歩き原稿を探そうとします。霧子さんに淡い恋心を抱きながら主人公は会ったこともない父の生前の姿を知っていきます。最後は霧子さんのスーパー推理が炸裂するのですが、伏線の回収を含めて論理的なので読んでいて心地よかったですよ。ラストの余韻は、君たちきっと好きだと思います。

BGM は エディット・ピアフ の 愛の賛歌 でした…。